

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(共同制作支援事業)

成果報告書

事業（公演）名	ala Collectionシリーズvol.11『移動』
代表団体名	公益財団法人可児市文化芸術振興財団
劇場・音楽堂等の名	公益財団法人可児市文化芸術振興財団、公益財団法人長岡市芸術文化振興財団、公益財団法人うつのみや文化創造財団、公益財団法人四日市市文化まちづくり財団
実演芸術団体等の名	株式会社文学座
内 定 額	16,759 (千円)

事業概要

(1) 事業の概要

趣旨・目的、ニーズ等
新作主義の日本演劇界で消費され続ける戯曲に対して、あえて過去の優れた戯曲に焦点を当て、リメイクして作品を再評価するという趣旨のもと実施してきた「ala Collectionシリーズ」は可児市文化芸術振興財団プロデュースによって、これまで10作品を世に送り出し、読売演劇大賞や文化庁芸術祭、菊田一夫演劇賞など数々の賞を受賞、東京一極集中の演劇創作環境に一石を投じてきた。作品の評価のみならず、本シリーズは、アーティスト・イン・レジデンスを通じてプロの創作現場を市民が支えるという公共ホールならではの視点によって企画され、地域での創造環境の整備と鑑賞者開発に成功した全国的にも珍しい事業といえる。そして、シリーズ第11作目となる今回は老舗劇団として日本演劇界をリードし続ける文学座と複数の劇場・音楽堂が共同制作を行うことで、更なる芸術的な高みを目指すと共に、可児市文化芸術振興財団が実施してきた地域での演劇創作のノウハウに加えて日本トップクラスの劇団の創作現場を共同制作館が共有し、それぞれのフィールドにおいて還元していくことで、地域の演劇環境の改善と発展に寄与するものとする。また、こうした本格的な演劇作品の創作機会を単独で実現することは財政的に困難であることから、複数の劇場・音楽堂等との共同出資による事業実施に参画できることは、それぞれの劇場・音楽堂等にとって大きな価値のあることである。
実施日時・実施会場（所在地）・実施回数
2018年10月15日～21日（6ステージ） 可児市文化創造センター・小劇場 2018年10月25日（1ステージ） 宇都宮市文化会館 2018年10月27日（1ステージ） 長岡リリックホール 2018年11月3日（1ステージ） 四日市地域総合会館 あさけプラザホール
演目・曲目、幕構成、主な出演者、主なスタッフ、あらすじ等
演目：「移動」、作：別役実、演出：西川信廣（文学座） あらすじ：カッと明るい真昼。時折、電信柱があるだけで、他には何も無い茫漠とした場所に赤ん坊を背負った女が現れる。あとに続くは家財一式を山積みにした荷車を引く男と、彼らより年を取った男と女。どうやら5人は家族らしい。一家はそれまでの暮らし、土地や人間関係と決別し、出発した。旅路には沙漠のように何も無い空間が広がり、目に入るのと同じような姿の電信柱だけ。日の明け暮れとお茶の時間だけが区切りの当てどない日々。彼らはただ黙々と歩みを進めていく。若い男、ピラ貼りの夫婦、反対方向から旅してきた別の男女。一家と束の間、時を共にする人々にも、同道者が少しずつ減っていくという現実も、彼らの道行を止めることはできない。行く先も、始まりや終わりも判然とせぬまま、ひたすら続く彼らの「移動」。その先にあるものは……。出演：竹下景子、たかお鷹（文学座）、嵐圭史、本山可久子（文学座）、田村勝彦（文学座）、山本道子（文学座）、横山祥二（文学座）、征矢かおる（文学座）、星智也（文学座）、美術：乗峯雅寛（文学座）、照明：阪口美和（文学座）、音響：中嶋直勝、音楽：上田亨、衣裳：岸井克己、オブジェ：菱山裕子、舞台監督：三上司
事業（公演）の特徴、鑑賞者利用者拡大のための工夫点又は戦略等
本事業の特徴は、岐阜県可児市でのアーティスト・イン・レジデンスで作品を創作し、プロの創作現場を市民が支える市民サポーター制を用いている。市民サポーターの主な役割は、約1か月半可児市に滞在するキャスト・スタッフに野菜やお米などの差し入れや手作り料理でおもてなしするカレービュッフェの開催、稽古場の掃除、小道具集め、広報宣伝、関連企画の実施など様々なことが考えられる。このように地域だからこそ出来る作品作りにチャレンジし、これらのノウハウを他の劇場・音楽堂等と共有することで、各地域での文化芸術活動の発展に役立てる。また、利用者拡大の工夫として、全国的に認知度の高い主演の竹下景子氏を前面に押し出した広報戦略を取ることで、各地域の鑑賞者の掘り起しを目指す。具体的には共同制作の特徴を活かし、竹下景子氏を含むキャストやスタッフなどのインタビュー記事や写真、コメント映像を共同制作館内で共有して各地の広報宣伝に役立てることや本公演の特設サイトやフェイスブックなどSNSの共有活用などが考えられる。その他、共同制作館同士が定期的にミーティングを行い、情報交換やアイデアを出し合う場を設けることで、互いの意識を高め合うことができる。
共同制作を行う劇場・音楽堂等、実演芸術団体
公益財団法人可児市文化芸術振興財団 公益財団法人長岡市芸術文化振興財団 公益財団法人うつのみや文化創造財団 公益財団法人四日市市文化まちづくり財団 株式会社文学座

共催者・協賛者・後援者・関係機関

可児公演

協力:可児市民サポーター 役割:公演制作のサポート

長岡公演

共催:BSN新潟放送 役割:広報協力

(2) 事業の目標値、実績値

実施会場	実施日程	入場者・参加者数	
		目標	実績
可児市文化創造センター	2018年10月15日～21日 (6ステージ)	目標	1,050
		実績	1,274
宇都宮市文化会館	2018年10月25日 (1ステージ)	目標	333
		実績	208
長岡リリックホール	2018年10月27日 (1ステージ)	目標	315
		実績	250
四日市地域総合会館 あさけプラザホール	2018年11月3日 (1ステージ)	目標	210
		実績	150
		目標	
		実績	
		目標	
		実績	
事業の目標値、実績値		目標	1,908
		実績	1,882

【妥当性】

自己評価

共同制作支援事業の意図や役割分担など事業が適切に組み立てられた（と認められる）か。

当該活動は公益財団法人可児市文化芸術振興財団、公益財団法人長岡市芸術文化振興財団、公益財団法人うつのみや文化創造財団、公益財団法人四日市市文化まちづくり財団の4つの劇場・音楽堂等と実演芸術団体である文学座が連携を組み、単一の劇場・音楽堂等では経費的な都合から実施が困難な質の高い演劇作品の公演を互いにノウハウを共有しながら、実施することが出来た。本公演では文学座から演出の西川信廣、美術の乗峯雅寛、照明の阪口美和、出演のたかお鷹、本山可久子、山本道子、田村勝彦、横山祥二、鬼頭典子、星智也など、プロダクションチームの大半の役割を文学座が担当し、作品の創作部分を牽引した。アーティスト・イン・レジデンスで数々の演劇創作に挑戦し、これまでに読売演劇大賞や菊田一夫演劇賞などの受賞歴がある公益財団法人可児市文化芸術振興財団が製作母体の役割を担い、公益財団法人長岡市芸術文化振興財団、公益財団法人うつのみや文化創造財団、公益財団法人四日市市文化まちづくり財団などを牽引する形での製作を行った。事業を実施するプロセスにおいては、キャスト・スタッフが約一か月半可児市に滞在するアーティスト・イン・レジデンスの仕組みを取り入れた。地域で作品を創作する特性を最大限に活かすため、一般公募から約20名の市民サポーターを募り、稽古期間中はキャストやスタッフを食事でおもてなしをするカレービュッフェの開催や稽古場のケータリング準備、広報宣伝のサポートなど様々な場面で本作品の創作現場を支えたことで、キャスト、スタッフと市民との交流が深まり、互いにかげがえのない時間を共有することができた。また稽古場ツアーや舞台探検ツアーなど様々な関連企画を実施したことで、市民に開かれた作品作りとして、普段は見ることが出来ない演劇作品が作られる過程を市民と共に共有し、演劇作りの魅力を伝え、集客効果を生み出した。また、公益財団法人長岡市芸術文化振興財団、公益財団法人うつのみや文化創造財団、公益財団法人四日市市文化まちづくり財団とは定期的に連絡を取り合い、これらアーティスト・イン・レジデンスのノウハウを共有しながらそれぞれの制作能力の向上に役立てた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

当該活動は、ala Collectionシリーズと銘打って、新作主義の日本演劇界における消費され続ける戯曲に対し、あえて過去の優れた戯曲に焦点を当て、リメイクして作品を再評価するプロジェクトである。本シリーズでは、これまでに2011年「エレジー～父の夢は舞う～」平幹二郎氏の読売演劇大賞優秀男優賞、文化庁芸術祭賞優秀男優賞、2012年「高き彼物」関西・十三夜会賞、2014年「黄昏にロマンスーロディオンとリダの場合-」渡辺美佐子氏の菊田一夫演劇賞特別賞、2015年「すててこてこてこ」坂部文昭氏の読売演劇大賞優秀男優賞など5つの名だたる演劇賞を数々受賞し、東京一極集中の演劇界において、地方発の演劇作品として日本演劇界から高い評価を得ている。今回は本シリーズの継続性を維持するため公益財団法人可児市文化芸術振興財団、公益財団法人長岡市芸術文化振興財団、公益財団法人うつのみや文化創造財団、公益財団法人四日市市文化まちづくり財団と文学座による共同制作として、不条理演劇の巨匠である別役実が1971年に書き下ろした作品『移動』を取り上げた。公演の企画内容および芸術性の高さという観点から本作品を上演する文化的、社会的意義を捉えた場合、約50年前の高度経済成長期に描かれた作品ではあるが、先の見えない道を電信柱に沿ってリアカーを引きながら移動し続ける一家の姿は、少子高齢化や核家族化、原発問題、貧困、格差など様々な問題や不安が渦巻く現代社会において、何ら解決策が見い出せないまま、ただ前に進むことしかできない現代の日本社会を反映した作品として提示した。また、本シリーズが恒例としている「家族」というテーマを新たな切り口で見せる意欲作として、女役竹下景子と男役のたかお鷹の夫婦を軸に、コミカルな何気ない家族の日常から、移動する過程で家族がひとりひとり亡くなっていくこの物語には、人々の人生と大きく重なる部分があり、その可笑しくも切ない一家の姿に、人間が生きる本質をじんわりと浮かび上がらせた。経済的意義において、複数の劇場・音楽堂等と文学座との共同制作として取り組んだことにより、経費的負担の軽減に繋がり、四都市9ステージの公演を実現することが可能となった。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

目標設定の考え方として、質の高い演劇の鑑賞環境は東京に一極集中している状況にあり、地域では財政的な理由から本格的な演劇公演は見送られるケースが多く、地域での鑑賞機会はほとんどない状況にある。このような背景からala Collectionシリーズは今回で第11回目を迎え、毎年、可児市発の質の高い演劇作品として各地域で演劇環境の発展に力を注ぐ全国の劇場・音楽堂等と連携を組み、質の高い演劇作品の鑑賞機会を提供することで新たな鑑賞者の拡大を目指すと共に、演劇の面白さや魅力を伝え、演劇ファンの固定化を目指すことを目標とすることと定めた。指標の設定においては本シリーズを過去に実施したことのある公益財団法人可児市文化芸術振興財団、公益財団法人長岡市芸術文化振興財団、公益財団法人うつのみや文化創造団体はその際の入場者数とアンケートの満足度数を用いて指標を設定した。また、公益財団法人四日市市文化まちづくり財団はこれまでの演劇公演を入場者数と満足度数を用いて指標を設定した。その結果、当該活動において、可児公演では入場者数1,050人（入場者率70%）以上を目指したところ、入場者数1,274人（入場者率78.2%）を達成し、鑑賞者アンケートの満足度80%以上を目指したところ、満足度97.8%を達成した。宇都宮公演では入場者数333人（入場者率70%）以上を目指したところ、入場者数208人（入場者率46.4%）を達成し、鑑賞者アンケートの満足度80%以上を目指したところ、満足度84%を達成した。長岡公演では入場者数315人（入場者率70%）以上を目指したところ、入場者数250人（入場者率70%）達成し、鑑賞者アンケートの満足度80%以上を目指したところ、満足度89%を達成した。四日市公演では、入場者数210人（70%）以上を目指したところ、入場者数150人（入場者率50%）を達成し、鑑賞者アンケートの満足度80%以上を目指したところ、満足度80.5%を達成した。入場者数においては、アーティスト・イン・レジデンスを実施した可児公演では入場者数の目標を大きく上回ったが、それ以外の宇都宮、長岡、四日市公演では目標に届かない結果となった。満足度についてはどの公演地とも目標を上回ることが出来た。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業期間において、4月の段階で公益財団法人可児市文化芸術振興財団、公益財団法人うつのみや文化創造財団、公益財団法人四日市市文化まちづくり財団の各担当者が可児市文化創造センターに集まり共同制作会議を実施した。そこでは、当該活動の全体スケジュール、予算、作品内容、広報宣伝、関連企画などについての意見交換を行うと共に、それぞれの会館の特徴や実績などを発表し合い、情報交換や交流を深める場として有効に活用した。公益財団法人長岡市芸術文化振興財団は都合により欠席した。広報宣伝においては6月の段階で共通デザインのチラシ・ポスターや主演である竹下景子氏のインタビュー原稿、スチール写真、コメント動画などを作成し、共同制作館が共有できるものとして効率性を図った。また、その後も当初予定した通り9月8日より稽古を開始し、9月16日に可児市文化創造センターにおいて記者発表を実施、10月より可児公演、宇都宮公演、長岡公演、四日市公演と実施した。事業費においては、入場料収入では予定額より150万円程度減となり、大きく下回ってしまった。その要因としては、可児公演以外の長岡、宇都宮、四日市公演において、都外活動が新聞などのメディアに取り上げる機会が少なかった為、各地域に本公演情報を広く浸透させることが出来なかったことが上げられる。各事業支出においては、出演、音楽、文芸費において200万円程度の予算削減を達成した。主な理由として出演料や各種プラン料などの見直しを図ったことが上げられる。舞台、運搬、会場費では300万円程度の予算削減を達成した。主な理由として舞台スタッフ人数の削減を図ったことが上げられる。旅費、謝金、宣伝費等では、350万円程度の予算削減を達成した。主な理由として宣伝予算の削減を図ったことが上げられる。委託費、補助金では440万円程度の予算増となった。主な理由は文芸費等の部分を委託費に移行したことが上げられる。このように全体支出でみると450万円程度の予算削減に成功した。

【創造性】

自己評価

我が国の実演芸術水準を向上する牽引力となることが期待できる国際的水準の公演であった（と認められる）か。

・新たな創造活動

作者の別役実氏了承のもと演出家の西川信廣氏が台本を大幅に刈り込み、新演出した。これにより作品の主題が鮮明となり、観客自身が登場人物たちに自身の今までの人生を重ね、かつその先にある“答え”を想像する作品となった。また東京公演から新たに付け加えられたラストのシーンでは、竹下景子氏演じる女とたかお鷹氏演じる男の背後に原発被害のあった福島県双葉町の原発PR看板を映像で浮かび上げ、人間が発明した豊かさや便利さとその結末からこの世の不条理さを強く観客に印象づけ、未だ解決されない問題に対して一石を投じる演出であった。舞台美術でも新しい試みとして、現代アーティストの菱山裕子氏の作品を起用した。作品の人型オブジェを別役作品のシンボル「電柱」に融合させ、不気味でコミカルな電柱を創り上げた。またオブジェを客席やホワイエにも配して独特の世界観を表現、観客たちの公演本編への期待を高めた。衣裳に関しては、プランナー岸井克己氏の創造的なアイデアが多く散りばめられたものとなった。あえて時代設定を不明瞭にした衣裳は、登場人物のパーソナリティを具現化したものであり、また死期が近い人物の衣裳は黒の要素を多く取り入れ、移動し続ける家族に常に付きまとう死を表現した。演出・舞台美術・衣裳、以上の点から本作は従来の別役作品のイメージを払拭する新しい別作ワールドを創り上げたといえる。

・劇場・音楽堂等・実演芸術団体の役割分担

既に地域での演劇創作の実績のある可児市文化芸術振興財団が製作主体となって実施し、可児市文化芸術振興財団と地域拠点契約を結んでいる文学座がキャストやスタッフなど優れた人材を本シリーズに提供する役割を担った。また、演劇界に広く精通している文学座と協議のうえ、キャスティングやスタッフニングの選定をしている全体の制作業務（予算管理、各種スケジュール管理、キャスト・スタッフ手配、広報宣伝計画、制作発表、巡回公演の各種手配など）は、可児市文化芸術振興財団がリード役を担い、うつのみや文化創造財団、四日市市文化まちづくり財団、長岡市芸術文化振興財団との意見交換やアイデア出しなどの場を設け、制作過程を共有した。地域での演劇創作の経験が少ない四日市市文化まちづくり財団から2名の職員が稽古期間中に制作アシスタントとして入り、創作ノウハウの蓄積に役立てた。このように可児市文化芸術振興財団が主体となって、共同制作館の全体の実演芸術の水準を向上させる体制を整えた。

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながった（と認められる）か

本公演の特徴である、アーティスト・イン・レジデンスという特性を活かし、かつ全国的に認知度の高い主演の竹下景子氏を前面に押し出した広報戦略で様々なメディアへの露出を図った。可児での稽古初日に実施した制作発表では、地元記者だけでなく、東京の記者も参加し、注目を集めた。この様子は中日新聞、岐阜新聞、朝日新聞で大きく取り上げられた。特に中日新聞は、東海3県を中心に7県で約230万部を発行し、東海3県での購読者率が65%を超える、影響力の高いメディア媒体である。制作発表以外にも中日新聞には、芸能面<おはよう出番です>で竹下氏を独占取材してもらい、本事業の取り組みを広く情報発信できたことは非常に意味があった。またテレビでは、人気トーク番組「徹子の部屋」へも竹下氏に出演してもらい、全国放送で公演PRにも成功した。

マスメディアへの露出以外では、稽古期間中に演出家とキャスト数名で制作現場の可児市の市長へ表敬訪問を行い、可児滞在中のエピソードや稽古の様子、作品への意気込みなどを語っていただいた。行政に劇場が進める文化芸術活動への理解を求めると同時に、劇場と行政が文化芸術活動に対して、共通の認識を持つことができた。以上の点から本事業の実施によって、当該劇場の評価の向上に繋がった。